

## 教養と専門のはざままで

菅沼 隆

### はじめに

全カリの運営委員総合担当を任せられるまでいわゆる「教養教育」に従事する経験がなかったので、すべてが新しい経験であり、発見の連続であった。私の前任校では、「専門学部の教育が重要であり、教養教育は弊害が大きい」というコンセンサスが確立していたこともあり、教養教育は解体されつつあった。立教赴任後も私にとって全カリは重要な位置を占めてこなかった。このため運営委員の2年間は、どのように職務に取り組めばよいのか、戸惑いの中で過ごしてきた。今回のシンポジウムのテーマも専門教育と教養教育との関連のあり方であり、私の戸惑う気分 に即したテーマであった。以下、シンポジウムを聞いての感想を簡単に記したい。また、私自身の反省を含めて、全カリ総合教育のカリキュラム編成について、気づいた点を書き留めてみたい。

### 直接的な感想

シンポジウムの率直な感想は、第1

に、現在の全カリの運営システムとカリキュラムを創設する際に、全学の叡智を集成し、莫大な時間と労力が注ぎ込まれた点を再認識させられたことである。第2に、専門と教養が大学教育の二本柱であるという総論は認めつつも、具体的な各論になると両者の関わり方についての考えは千差万別で、各先生方も日々模索されていることがわかった。私の戸惑いと同様の悩みを多くの教職員が抱いているという安心感を得たことであった。

前者の叡智と労力の結果、立教の全カリは運営体制とカリキュラムの量と体系において、ほぼ完成された形でスタートしたと考えられる。現在の我々はこの創設者の方々の「パラダイム」に基づいて日々の運営「業務」をこなしていると考えられる。実際に委員として業務に携わってみると、カリキュラムに対応した専門の研究室体制および各学部選出の運営委員による全学的な運営体制が確立しており、緻密なシステムとなっている。だが、それ故に仕事がルーチンになってしまっているとも言える。つまり、役割と責任が

定型化され、形式的に運営できるようになっているために、あまり悩まずにカリキュラムを編成できる。定型化した運営はメリットが多いが、しかし、形式主義に流れる危険性がないとはいえない。失礼な言い方になってしまうかも知れないが、明治学院大学の嶋田先生が専門学部の理解を得るために試行錯誤をされているお話に魅力を感じたのは、本学にはない運営体制の自由度・不確実性があったからのように思われる。

後者の専門と教養との関係については、解決をみたわけではなく、むしろ今回のシンポジウムで改めて問題が浮かび上がったと思われる。「教養の上にたつ専門人」というスローガンについては全く異論はない。しかし、カリキュラムの編成や個別の授業の組み立て方という個別具体的な課題に踏み込んだ途端にこのスローガンに戸惑ってしまう。良くも悪くも専門と教養との関係は、常に不安定な「揺らいだ」試行錯誤の過程にあるということなのだろうと思われた。ただし、試行錯誤の過程にあるという自覚が新しい試みと組織に緊張感をもたらすわけで、むしろ望ましい状態でもあると思われる。その意味では多くの教員が戸惑いの中で授業を工夫されている姿が健全な状態ではないかと思われた。

## 1. 専門の改革に即した全カリの改革

さて、シンポジウムでやや気になっ

たのは、教養教育の重要性を強調されるあまり、専門教育についての位置づけが不明確であった印象が残ったことである。寺崎氏は実業界も教養人を求めている点を強調されていたが、しかしそれはやはり一面であり、専門的な知識がなければ社会が評価しないこともまた事実なのである。であるから、問題は専門と教養とのバランスの問題（古典的問題）であるという一面がある。しかし、それだけでなく専門と教養それぞれの内容の問題（新しい問題、質的革新の問題）をどのように考えるのかという点にあるように思われる—もちろん教養教育とは何か、定義を明確にしなければ議論はできないのであろうが、ここでは深入りしない—。そして、今日特に問われているのは、後者の質的革新の問題であるように思われる。この質的革新の問題は専門と教養が自らどこまで教育内容を革新しうるかという点にかかっているわけであり、その意味で全カリのカリキュラムを操作すれば足りるというのではなく、現在の学問の動向と専門学部の改革に連動するもののように思われる。全カリが自己完結的な世界を作ることとは避けなければならないと思われる。

## 専門への関連づけ

専門学問には、「隣の芝生（隣接分野）は青く見える」という傾向が一面ではある。経済学をベースとする私に

としては、社会学や政治学は経済学が正面から扱えないテーマ・概念を扱っているため大変魅力的に感じる。経済学もまた社会学・政治学からみると魅力を有していると思われる。専門化した個別社会科学にはそれぞれ強みと欠点があるのである。しかし、専門化・一面化することによって知が発達することも事実である。何でもほどほどに知っているが得意ななわばりを持たない教養人を社会が要請しているわけではないので、専門教育の重要性をもっと強調してもよいのではないかと思われる。

教養教育に求められるものは、実は専門学問を尊重する姿勢ではないかと思われる。すなわち、それぞれの専門学問を学ぶ動機付けを与えることにある。現在の総合科目はこの点では改善の余地があるように思われる。この理由は簡単である。一方で専門からみると教養科目もまた「隣の芝生」として魅力的ではあるが、他方では、教養（総合）科目も、教える者にとっては授業は自分の専門である。自分の専門には強い思い入れと愛着がある。自分の科目の魅力を語ることはある意味簡単である。だが、同時に専門科目への動機付けも与えることが教養科目の役割ではないかと思われる。個別専門分野にとって他の専門分野は学問上の与件として扱われていることの重要性を自覚すれば、他の専門分野を軽視することはできないであろう。この点で、

私は教養科目は専門科目にとって有用な科目になると思われる。すなわち、専門科目の意義と限界を自覚し、専門を学ぶ意味を学生が理解しうるからである。

残念ながら、全カリの（経済関連科目以外の）授業を聞いて私の専門の経済学を学ぶ意義を再認識したという学生を聞いたことがない。受講した学生に全カリ科目と専門科目とを関連づける思考回路が形成されていないのである。この理由は明らかで、全カリのカリキュラムの編成も授業担当者も専門科目との接続を自覚していないからである。せいぜい補完的機能、すなわち専門に欠けている分野を補完することで、リベラルアーツたらしめているように思われる。しかし、教養とは決して専門を軽視することではなく、むしろ、専門の専門たる領域を尊重しうる能力も指していると考えられる。専門を軽視するような「教養人」は私には形容矛盾に聞こえる。

このように考えると総合科目を担当される教員は、視野の広い、周辺領域にも造詣を有する者であることが望ましいように思われる。教員に自分の専門の重要性のみならず他分野の重要性を学生に理解させることができるような学問的謙虚さが問われるということになるのか。

## 2. 導入教育への関わり方

総合科目は全学年を対象としている

ために特定の学年について配慮するという事は極めて少ない。ご存知の通り、一般的にあって、新制大学の教養教育が批判を受けてきたのは、新生をスポイルさせる「逆機能」を果たしてきたというものがある。つまり、つまらない授業と安易な成績評価により学生の学ぶ意欲と緊張感を萎えさせてしまうという批判である。これは私の学生時代の実体験からも説得力があった。

立教の全カリは導入教育でないと位置づけ、カリキュラムの体系化をはかることにより、この批判を避けることにある程度成功している。だが、全カリは、実質的には学年次指定がないために、導入教育的な機能を果たしているところがある。この点は軽視できないように思われる。科目の編成も学年指定がない。これにはメリットもあるがデメリットもある。特に私が危惧するのは入学したばかりの一年次生に対する配慮である。これは専門学部が責任を負うべき領域であると考えられていると思われるが、全カリが一年次生に如何に関わるのかという点は再考してもよいのではないかと思われる。

このような点は全カリ総合科目が必修科目を廃止したことの利点と表裏の関係にある。だから、簡単には解決がつかない。だが、導入教育は大学4年間の勉強態度を決定するほどの重要性があると考え、全カリの関わり方を検討する必要があるように思われ

る。例えば、ノートの取り方、資料の探し方、レポートの作成の仕方、質問の仕方などいわゆる「読み書き算盤」の領域に全カリは関わらなくてよいのだろうか？あるいは、総合科目のカリキュラム体系や学問体系の全体像を示して、個別の科目の位置づけを理解させるような試みは必要ないのであるか？学ぶインセンティブを高めるような一年生前期のみを対象とした「学問入門」科目は必要ないのであるか？

### 3. 難しさと分かりやすさのはざま 難しさの自覚

これから私は一見矛盾する2つのことを述べたいと思う。教養科目に必要な2つの条件である。一つは、学問は難しいということを実感させることである。例えば、経済学ではアマルティア・センの厚生経済学などというものがある。近年流行の福祉の経済学を学ぶ場合には知っておいた方がよい領域である。福祉に関心のある学生は学部を問わず習得したいかも知れない。だが、実はこの福祉の経済学は非常に難解である。20世紀の経済学の系譜を相当程度学ばないと理解できない。おそらく、経済学部以外の学生がセンの厚生経済学を聞いても理解は難しいと思われる（我々がケインズ理論の意味を理解させるためにレッセフェールから説き起こさなければならぬのと同様に、近代経済学の効用と資源配分の理論を知らずしてセンの理論を正確に理

解することはできない)。だが、そのような講義であっても聞く意味はあるのである。「センという学者が機能などという難しい概念を提唱し、難しい厚生経済学の新しい地平を築いた」と知ることは、厚生経済学を全く知らずに何らの評価もできないことよりも遥かに意味深いのである。同様に、経済学部の学生がニュートリノについて触れて、「理解はできないが何か宇宙の存在に関わるものらしい」と知ることは極めて重要である。「嫌いも好きのうち」といわれるが、無関心よりも「嫌われる」方が重要なのである。このような難しさを自覚することが教養の要素であるということだろう。

だが、問題は現在の全カリの制度のもとでは、学生は「難しい授業」を避けることが容易なことである。この点はガイダンスやシラバスで誘導する努力が必要であるが、必修で縛ることのできない全カリのアキレス腱の一つであろう。

### 楽しさの追求

他方で、教養科目の必須条件は何かと問われると、一言でいって、楽しさではないかと思われる。もちろん、それは知的な楽しさである。

私は、大学一年生の時に、専門のことを英語で **discipline** (しつけ・作法) と呼ぶのは何故なのか不思議に思ったことがあった。この呼び方に得心があったのは大学院を卒業する頃であった

ような気がする。専門というのは、その専門学問の作法に基づいて論理を考察することであり、その作法に基づかないと説得力がないのである。その意味で専門の作法を身につけていなければ認められないのである。作法を身につけるといえるのは、単調で苦痛な稽古の積み重ねである。専門科目というのは **discipline** であり、そのような積み重ねが必要不可欠であり、苦痛なしには **discipline** は身に付かない。学部の専門科目はそのような苦痛を甘受させることが許容される分野であると私は考える (もちろん専門科目は本来それ自体楽しいし、授業担当者は楽しいモノにする努力が必要である、しかし、苦痛も必ず伴う)。

これに対して教養科目の場合は、それほど厳しいしつけは求められない。なぜなら、学生はそれを主要な武器にして社会に挑んでいくわけではないからである。一生専門として学ばないかも知れない領域を学ぶことに意義があるわけであるといってもよい。素人に学ぶことの楽しさを自覚させ、知的好奇心を刺激すること、専門的知識の意義と限界を自覚させ、奥行きのある思考をすることに意義ある。教養科目の聴衆はすべて素人であるとみなしてよく、それ故授業は楽しくなければならぬ。ここが教養科目担当者に求められる資質であるように思われる。そのような授業を工夫する努力に報いるシステムが全カリにはとりわけ必要であ

るように思われる。

このように考えると教員にとって総合科目は、専門学部の授業とは異なった工夫が必要であると思われる。そのためには授業改善に対するバックアップ体制の充実と工夫の成果の交流を進めることが大切であろう。

## 終わりに

運営委員として教養と専門とのはざままで揺れ動いてきたが、他学部の多くの先生方と交流することができ、知的な刺激に満ちており、得られたものも大変多かった。全カリと立教大学の「奥の深さ」を発見することができた。その意味で「刺激的な2年間」でもあった。全カリの楽しさはこの学際性にあるわけで、我々教員にとってもベネフィットが大きかった。

現在、立教大学全体の改革が急速に進む中、学部の再編や大学院の充実、社会人学生の増大などで、専門教育のあり方も変化しつつある。専門教育の地盤自体が揺らいでいるように思われる。全カリの学際性がこのような専門の再編にプラスの効果を与える可能性がある一方で、全カリも新たな対応が早晚必要になるのではないかとと思われる。

すがぬま たかし

(本学経済学部助教授,  
2002年度全カリ運営委員)